
日常からさようなら

猫が好きな人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常からさようなら

【Nコード】

N5802W

【作者名】

猫が好きな人

【あらすじ】

眼が覚めたらそこは異世界！？これなんてテンプレ？

なのにすごい能力的なものがあるのは違う人とか。

…あれ俺が主人公だよね？

登場人物 その壱（前書き）

妙に無駄な設定が多いです…。

登場人物 その壱

ネタバレは少しなので参考程度に読んで下さい。

筒条書きです

もしかしたら増えるかも

鷹羽 黒斗

年齢 16歳

誕生日 6月30日

身長 169

体重 56

職業 未定

属性 風水

髪色 臙脂色（少し日焼け有）

髪型

肩にかかる程度（剛毛なのである程度伸ばさないと髪が逆立つ）

眼の色 黒

好物

梅干し

和風出汁の効いたもの

子供を庇って弾かれ、目覚めたら異世界にいた可哀想な少年。
家は室町時代から続いている舞踊家の宗家。

様々な習い事をさせられているため意外となんでも出来る。しかし
万能型というより器用貧乏型なので中途半端なことが多い。得意と
胸を張れるのは舞踊と馬術のみ。

頭はそれなりによく、有名私立高に学年トップで合格出来るレベル。
でも最近はやがって来ている。

顔は少し母親似の女顔だがそれなりの美形。しかし周囲の人物が美
男美女すぎて目立たない。

出汁のきいた食べ物が好きだが此方には無いためショックを受けて
いる。

基本的にツツコミ。そして不憫な子。

リンク エルヴィン

年齢 17歳（推定）

誕生日 不明

身長 173

体重 60

職業 魔法剣士

属性 風

髪の色 銀

髪型

クセつ毛を腰の辺りまで伸ばしてある（切ると子供達に泣かれる）

眼の色 青紫

好物 リンゴ

グリューンにあるリベア孤児院出身の騎士志望の青年。
中性的で幻想的な美人（自覚無）

頭はよさそうに見えるが馬鹿（というより学が無いだけ）。でも頭の回転は早い。

手先は不器用だが料理スキルは高い。特にお菓子作りが得意。
油っこい物や甘い物が苦手。少しベジタリアンっぽい。
潜在的な魔力が高いためか食が細くても平気。

好奇心旺盛だが興味の無いものには恐ろしく冷たいことがある。
熱しにくく冷めにくい感じ。

基本的にボケ（天然）

ルミ レブメント

（本名はもっと長い。ルミはあだ名）

年齢 15歳

誕生日 11月1日

身長 166

体重 50

スリーサイズ

B82 W56 H80

職業 格闘家

治療術士

属性 火光 無属性

髪色 金

髪型

肩甲骨の辺りまで伸ばしたウェーブヘア

眼の色 金（髪よりも少し濃い）

好物 肉

リベア王国の第一王女で第三位王位継承者。

ミミとは双子の兄妹でお互いにブラコンでシスコン。世界で一番可愛いのはミミと豪語する程度のレベル。

ルミという名前はミミが付けた。

町を歩けば誰もが振り返る美少女。それなりに自覚はあるが足りていない。（ククロト談）

極度の面食いで美人（男女問わず）を見るととりあえず口説く。ちなみにストライクゾーンはバリ広で女性なら8〜45歳、男性は8歳〜40歳までならいけるらしい。だが別に付き合いたいとかでは無い。最近ロリシヨタもいけることに気付いた。

残念な美少女ではあるが空気は読める常識人。（箱入りなので若干ズレてはいる）

治癒術の才能がずば抜けて高い天才肌。格闘もなかなかの強さを誇るが、もの凄く燃費が悪く大食いのため周囲に呆れられることもよくある。

歌が得意。楽器も出来る。

基本的にボケでムードメーカーだがツツコミもいける。

ミミ レブムント

(本名はもつと長い。ミミはあだ名)

年齢 15歳

誕生日 10月31日

身長 160

体重 45

職業 ガンマン

補助魔法使い

属性 水 光 無属性

髪色 桃色がかつた茶 (FF13の主人公みたいな色)

髪型

緩くクセのある髪を首の横で結んでいる

眼の色 翡翠

好物 甘い物全般

リベア王国の第一皇子で第一位王位継承者。

ルミとは双子の兄妹でお互いにシスコンでブラコン。だがルミ程ひどくない。

ミミという名前はルミが付けた。

初対面だと必ず女性に見られる程女性的な少年で顔も女顔。よくみれば少年に見える顔立ちではあるが、持っている雰囲気柔らかいことが間違いに余計に拍車をかけている(クロト談)。

無表情でいることが多いが、愛想良く常に敬語で話すことを心がけていてとても礼儀正しい。

眼鏡は軽い乱視を矯正するための物。別に無くても平気だが銃を撃つときに必要。視力自体は良好。

頭はかなり良く、一度覚えたことは忘れないくらいに良い。また速読も出来る。

集中力が高いがある程度経つと甘い物を大量に摂取する癖がある。

しかし、なぜか肉がつかない。
潜在的な魔力は決して高くないが繊細なコントロールが得意。それで体力の無さと運動神経の悪さを補っている。
ルミ程ではないが歌が得意。でも楽器はミミの方が上手い。
基本的にツツコミだが時たま天然でボケる。

エリザベートⅡハインツベルン
通称エリー

年齢 16歳
誕生日 4月8日
身長 178
体重 62
スリーサイズ
B88W63H85
職業 大剣士
属性 火 大地
髪色 藍色
髪型
肩より少し長い髪を後ろからピンで止めている
眼の色 水色
好物 チョコレート

貴族ハインツベルン家の長女で落ちこぼれの、騎士志望の少女。
エリーとはクロトがなんとなくて付けたもの。

真面目で頭が硬く融通の利かない性格。また、8歳年上の兄に育ててもらったからか、口調も固い。高い身長や女らしく無い自分に密かにコンプレックスを抱いている。しかし彼女にはファン（主に女性）も多い中性的なイケメン（着飾れば美少女）である。いつかは立派な主人に巡り会いたい仕えたいと思っている。理想は弱くても芯の通った人。

ハンザ メルフィム

年齢	26
誕生日	不明
身長	183
体重	75
属性	大地 闇
職業	盗賊
髪色	黒
髪型	
赤いバンダナで髪を上げている。前髪で片目を覆っている	
眼の色	灰色

ソイル国の砂漠を根城にしている盗賊団の頭領。標的は悪徳貴族や観光客が多い。奪った金品をスラムの人々に配るなど義賊のような行いをよくする。黙っていると何か悪巧みをしている様に見える悪人顔。だが端正な

顔でもあるためファンも多い。

着痩せするタイプで一見細身だが脱ぐとけっこう筋肉質。

片目を隠しているが意味は無い。昔盗賊ならばと眼帯を着けていたが距離感が掴めなくて断念。代わりに髪で覆うようになった。ときどき隠している目が入れ代わる（ガチャ目予防）。

女好き酒好きギャンブル好きと三拍子揃った駄目男だが人望はあり、彼の手下は彼をとても慕っている。

ちなみに好みのタイプは金髪巨乳とギャップ萌えらしい。

登場人物 その壱（後書き）

これからも増えるのかもです。

世界への別れ（前書き）

誤字脱字の指摘お願いします。

世界への別れ

「危ない！」

それが俺の人生最後の言葉だった。
どうしてこうなったんだろうか？

こんなときに限って冴え渡る俺の頭に悲しくなりながら、今日の行動を振り返ってみた。

きっと人はこれを現実逃避というのだろう。

がしゃっ。

「…んー」

五月蠅い目覚ましを叩いて消した。
毎朝全く同じ行動をしている気がするのは気のせいだろうか？
案の定外はうす暗い。当たり前だろう。まだ4時15分。もちろん朝の方のである。

…何故こんなに早く起きねばならないのか。あ、これも毎日考えるてんな。悲しくなってきたぞ…。うう泣きたい。

まだ頭がボーッとしている。二度寝しようかな…

「黒斗坊っちゃん！起きて下さい！」

俺がぼんやりとそんなことを考えていると、台所の方から臯月さんの声が聞こえた。

ちなみに臯月さんとは家で働いている所謂お手伝いさんだ。50歳位の優しい人である。

だが15歳にもなつて坊っちゃんはよして欲しい。少し気恥ずかしいものがあるし。

「今いきまーす！」

早く着替えなければ。こういう時着物は楽だ。帯解けば脱げるし。

俺は無地の濃い赤茶の着物に袖を通して、黒っぽい帯で着崩れない程度に縛った。

慣れたものであるなとなんとなく思った。まだ温かい布団を名残惜しげに眺めて、俺は部屋を後にした。

ギシギシと廊下から音がする。いつか床が抜けそうで、薄暗い朝ではなおのこと怖い。

「おはよございませす。黒斗坊っちゃん。」

「遅いですよ。黒斗。それにもっと品良く歩きなさい。」

「おはよ。臯月さん。母さん。」

ギシギシと音をたてて廊下を歩き、台所の戸をひいた。真新しいフロリングの上をぺたぺたと歩き、朗らかに笑う臯月さんと、軽く俺をたしなめる母さんに挨拶してから席に座った。

上品について無理じゃね？俺が悪いんじゃないかと廊下が悪いと思う。

ご察しの通り我が家は古い。家も考えも。所謂旧家というやつだが、台所と風呂とトイレは母さんの強い希望によりリフォームされている。

和式で古い我が家だが、そこだけが真新しくして少し浮いている。

「いただきます。」

朝食にしては早すぎる食事をとりながら今朝の予定を聞く。

「母さん。今日の朝稽古何すんの？」

「そうですね。今日は花を生けましょうか。」

「りょーかい」

母さんの答えにてきとーに返事をして味噌汁をすする。あー味噌汁美味えな。さすがは臯月さん。

俺の家は舞踊家の家である。それに結構大きな流派だそうな。

なのに俺は舞踊以外にも茶道や華道、書道などたくさんのをやらされている。今日は華道のようだ。

他にも関連性のまるで見えないピアノや乗馬までやらされている。

何処のお嬢様だ。まったく。…俺か。

ふつつと不満が沸き上がってきた。

家が家なので普段見るテレビや聴く曲などが年寄りくさく、学校での流行りの話についていけなかったり
クラスメートに「お前ってジクセエよな」と笑いながら言われたり、苦い思い出も多い。後者なんかは特に。

「…斗。黒斗？」

「ふえっ！？な、なに？」

思考に没頭してたらなんか変な声がでた。我ながら気持ち悪い。

「どっしたの？ぼっつとして。早く食べなさい。」

「あ、ヤベエ、冷める!」

まだほとんど手をつけられていない食事を見て、少し呆れたような
声言われた。

臯月さん力作のすっかり冷たくなっただし巻き玉子に箸をのばしな
がら母さんの方を見る。

あれ?なんか違和感。

「臯月さんは?」

そつ。臯月さんがいないのだ。何処いったんだろっか?

「もうお帰りになりましたよ。急な用事とかで」

「そっか。珍しいな」

「そうですね。」

気づかなかった。

急いでメシをかつ込む俺。稽古は意外と体力を使う。華道も例外ではないので、食いつぱくれたら最悪だ。

「もう少し静かに食べなさい。私は先に行って準備をしていますから。なるべく早く来るのですよ」

「んー」

生返事の俺に何も言わずに出ていった。てか母さんの歩く音聞こえねえ。どうやるんだよ… ippitai。

母の謎のスキルに驚きながらも食事を終える。

「ごちそうさま」

食べ終わってカチャカチャと食器を下げながら、冷蔵庫に付いているデジタル時計を見る。マズイな…、遅くなってしまった。

俺は離れにある稽古場まで駆け足で向かった。

…正直稽古のことは思い出したくない。とりあえず切れた母さんは超こわかったです。自分の親とはいえ美人が怒ると迫力が違う。

6時半位に稽古でかいた汗を流して、学校の準備をする。いつもは皐月さんが作ってくれる弁当があるけど今日は無いので買い弁だ。コンビニに行くため財布も忘れずに入れておく。

7時に家を出て自転車で学校へ向かう。学校は9時からだが家に居ても意味はないのと、授業の予習とかをするため、俺の登校時間は早いのだ。

高校生になって6ヶ月。

2ヶ月前から始まった俺の朝のサイクルである。くわあと欠伸を一つ。目を擦る。…仕方ない予習は諦めよう。

「鷹羽！起きろー。もう昼だぞー」

「てか朝から爆睡ってどうなんだ…。おい、起きろ黒斗」

「…寝不足？」

俺の周りで声がする。数は3つ。嫌味なぐらいいい声だった。畜生。うつすらと目を開ける。

「んー。おはよ…一時間目終わっちった？」

「もう昼だ。あほ」

「うえっ！？ヤバイ…。ノートが」

寝惚けている俺に冷たくツッコミをくれたのは、クールでメガネなイケメン（というか美人？）の当麻柚希だ。

「早くメシ食おうぜー！おれ、腹ペコだよー」

急かしている茶髪のチャラ男の優男が眞木晴幸という。いつも悩みなんてなさそうな笑顔が眩しい。名は体を表すとはこの事だろう。

「…（じゅー）」

「無言で見んなよ！怖いから」

この無口なイケメンは空野波音という。正直名前に負けている気がするんだが。喋ればいいのに。モデル顔負けのイケメンでいいスタイルしてるんだから。勿体無い。

「早く！メシ！」

「単語で喋んな。うぜえ。ああ。ノートなら貸してやる。安心しろ」
腹ペコというのは本当のようだ。腹の虫がぐーぐーと鳴ってるのが聞こえる。イケメンなのに残念な奴だな眞木よ。にしても袖希マジイケメン。

「サンキュー。早く食おうぜ。眞木がうっさいし」

俺の机に4人分の昼食が並んだ。

なんだか視線を感じる。それも沢山の。まあ三人とも目立つし、俺もいろんな意味で目立っているから仕方無いんだけど。一緒にいることが最近増えたから視線が増えた。少し落ち着かない。

「どうしたのー。鷹羽」

もう慣れてしまっているのだろう。眞木も波音も気にした様子はない。袖希はわかんないけど。

「なんでもないよ。いただきます」

はぐらかすようにパクリと朝買ったパンにかぶりつく。
美味しいなこれ。

「あれ？今日はパンか？鷹羽」

眞木お前は弁当か。旨そうだ。

「ああ。今日は弁当作る人居なくてさー」

「確かにいつも弁当だったな。黒斗は」

柚希も弁当だ。いつも思うのだがこいつの弁当は旨そうだ。親が料理上手なんだろう。

そういえば買い弁は久しぶりだ。たまにはいいなパンも。

「…お手伝いさん、休み？」

「用事だつて言ってた」

訊ねてきた波音に朝のことを思い出しながら言った。パンもいいが、やっぱり臯月さんの弁当が一番美味しい気がする。

弁当か…。柚希の旨そうだなー。肉食いたい。

「柚希ー。唐揚げくれー。」

「…いいぞ」

「え？いいのか？」

「欲しかったのはお前だろう。ホレ、さっさと食べ。」

眞木に弁当のオカズをねだってみる。断られると思ってたから驚いた。

「食わないのー？ならおれが」

眞木がへらへらしながら言った。

「お前と同じだろ。俺が作ったんだから」
「ムグッ！……上手い」

と俺の口に押し込みながらった。柚希料理上手いのか。初耳だ。つか唐揚げ上手いな。冷凍食品じゃないきちんと揚げてある。下味もばっちりだ。

てか弁当作ってるってあげてるって

「付き合ってるみたいだな。お前らって」

「ハル（ユズ）と？ありえないな（ねーな）」

即答された。二人とも顔が嫌そうに歪んでる。コイツらは所謂幼馴染みらしい。そして親友でもあると。仲の良さは小さいときの呼び方で呼びあつてるぐらいだから相当いいんだろう。本人達曰く腐れ縁らしいけど。

「…なんで袖希が？」

ナイスだ波音。俺も気になる。

「節約の為だよー！」

「勿論食費はハル持ちだ」

何か問題でも？といった感じの顔をしている二人。どちらかといえば夫婦のようだ。

「…どこのギャルゲ？」

それは聞いちやダメだろおおお！！！！波音さあん！

俺も思っただけども！

「はあ？」

ギロリと眼光が鋭くなった袖希。美形がやると余計に怖い。

「…幼馴染み尽くし系、クーデレ、お弁当、」

「あと一緒に登校とかか？してんの？」

「朝練無いときはね。見事にそろったなーユズー」

からからと眞木が笑う。

確かに見事だがこのままだと絶対袖希が切れそうだし。意外と短期だし。

「やめろ気持ちわ」

案の定切れた袖希がバンと机を叩いて立ち上がりかけた。マズイ。

「ハイハイハイ。早く食べようぜ。あんま時間無いしき。な？」

怒鳴りかけた袖希の言葉を慌てて遮る。

「チツ…。あとでハルは殺す」

しぶしぶといった様子だがとりあえず大丈夫そうなので安心だ。ボソツと呟いた言葉は聞かなかった事にしよう。触らぬ神に祟り無しとはこの事だ。

(よくやった！鷹羽)

(…ナイス黒斗)

(俺超ファインプレーじゃん！)

(…元々の原因は黒斗)

(いや、波音だよー。しても危ない危ない。ユズキレっと怖えからな。)

(マジか)

(マジマジ)

(…御愁傷様。晴幸、バイバイ)

(え…ちょっと何？何なの!?)

(じゃあな。眞木今までありがとう。)

テレパシーで会話とお別れをする俺達。もう食事は終えている。
柚希はまだ黙々と弁当を食べてるが。

「……………」
「ごちそうさま」

どうやら食べ終わったらしい。

「午後の授業何すんの?」

準備をしようと思木に聞いた。

「ん?もうホームルームやったから帰れるぜ?」

「マジか。」

これは嬉しい。今日は用事があるから尚更だ。その事を伝えると

「ええー。今日遊べねーのかよ。鷹羽え」

「残念だな。黒斗。ノートは明日でいいか？」

「…残念だね。黒斗」

「わかった、ありがと柚希。また明日！」

『また明日なー』

名残惜しいが仕方ない。俺は急いで教室を出ていった。

坂道を自転車でかつ飛ばす。

今思えばきつとこれが悪いのだ。そんなの後の祭りでしかないけれど。

風が下から吹き上げてくる。弾かれて吹っ飛んでガードレールを越えてしまったらしい。

ああ。あの子は無事だろうか。咄嗟に突飛ばしちまったし。弾かれ

てないならいいか。

バカだよなー俺も

そんなこと考えてたらやって来た暗闇に俺は自ら意識を手放した。

世界への別れ（後書き）

BLみたいな感じが含まれてたかもしれませんが、ギャグみたいな
ものです。不快な方はすみません。

良く晴れた空と雲のコントラストが美しい。

そんな空の下、木陰に腰掛けている幻想的な雰囲気少年がいた。

彼は長い銀髪にほの暗い夜のような色の瞳を持った、一見すると少女のような美しい容姿の少年だった。

疲れているのか少々眠たげな表情をしている。

「風が心地よいな」

ポツリと漏れた声は少年の発したとは思えないほど低く、威厳に満ちていたが、可憐な容姿には似合わないものだった。

彼が木陰で心地よい風に目を細めていると、一際強い風が吹き彼の衣服を揺らした。

灰色の外套の中には、胸元を覆う白地に青の紋章の入った薄い軽鎧と、似たような色合いの金属製のブーツが見えた。腰には鎧と同じ模様の鞘に納まった剣と短刀があった。

誰の目から見ても仕立ての良いそれは、身分の高さをうかがわせる。

全体的に白い物が多い彼は、幻想的な雰囲気と相まって、まるで白昼夢のように消えてしまいそうな印象を受ける。

ザアザアと木の葉が揺れる。その音に眠気を誘われたのか彼の頭は船を漕ぎ始めている。

彼が心地よいまどろみに浸っていると

「　　さまあ〜」

ふと幼く愛らしい声が聞こえた。

「……………」

声の方へ気だるそうに目をやると見事な栗毛の馬が此方に走ってきた。

「　　さま　ここにいたんですかあ！」

「　　様やつと…見つけ…ました…っ！」

そこに乗っていたのは、ふわふわした金髪の幼い少女と、赤みがかった黒髪の少年だった。

黒髪の少年は慣れていないのか、たどたどしく馬を操り、後ろに少

女を乗せてこちらへと駆けて来た。

「お前達は必ず私を見つけてくれるのだな」

とまだ眠気を孕んだ声で少年が呟いた。どことなく嬉しそうな声音だった。

「なにかいいましたかあ」

いつ馬から降りていたのだろうか
首を傾げる金色の少女供に

「いや、何でも無い。何かあったのか？」

と少し疑問に思いながら、赤みがかった黒色の子供に問うた。

「おきやくさまだよあ」

と金色の幼女が舌つ足らずの声で言った。いまいちよくわからないが、そうかと頭をなでる。ふわりとした猫っ毛の触り心地が気持ち良かった。

少女も気持ち良いのか猫のように目を閉じている。

何故か口元が汚れていたが気にしないでおう。

「もうすぐお客様がいらっしやるんですよ。」

と黒色の少年が言った。どうやら自分も撫でて欲しいようである。羨ましそうに少女を見ている。

仕方ないと薄く笑って少年の真っ直ぐな髪を撫でてやる。幼女とはまたちがうさなりとした感触が気持ち良い。

少し顔を赤くしているが嬉しそうだ。気持ち良いのだろう。目を細めている。

「…ハッ!? ってこんなことしているばあいじゃありません! お客様が見えているんです! 急がないと!」

と我に帰った黒色の少年が叫ぶように言った。

「わすれてたよお! はやくはやくっ」

そういえばそうだと二人が混乱し辺りでわたわたと慌てている。彼は苦笑しながら口元に指をあてると

ピイイイイ

と高らかに音を鳴らせた。

「行くぞ。お前達」

と言って木陰から出て、樹の無い開けた場所に向かって行った。

そこにはとてつもなく大きな鳥ガルーラがいた。鞍が付いているのでおそらくはこれに乗って来たのだろう。

「うわあ〜！すごいがるーらだあ」

少女が興奮しながら言った。

「でも、僕たちには馬が…」

と少年が戸惑ったような声音で言った。

「離しておけばよい。あれは賢い。自力で戻れるだろう。」

と言って三人が乗れるように鞍を整え始めた。

「うわあ。たかいい」

「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！速iiiiiiiiiiii！！！！！！死ぬううう！！！！！！！！？」

「城まで全力で頼む」

「まだ速くなるんですかああああ！！！！！！！！！！？いやああああ！！！！！！！！！！」

黒赤の少年と、さりげなく無理を言う自分の主人に呆れながらガラーラは、城へと羽を動かした。

美しい神がいたと言われる、白銀の城へと。

美しい空に少年の悲鳴と力強く羽ばたく翼の音が響いていた。

名の無い夢 1 (後書き)

三人称の方が楽だった。これはどうなんだろ…

眼が覚めたら雲の上（前書き）

会話文が多いです。読みずらいかも。

眼が覚めたら雲の上

夢を見た。不思議な夢だった。懐かしい、そう思うのは何故だろう。あの子供達の名前が聞き取れなかったのは何故だろう。疑問は多い。

思考がぐるぐるとまわる。

おれ死んだ？ここは？てか何も感じないのは？

いったいどうなって？

「おい、起きろ。起きぬか。少年」

なんか多いな今日は。人に起こされんの。って違う。なんで人の声が？

「あんた誰なんだ！？つかここは！！？」

がばりと上半身を起こすとそこには長い金髪の三つ編みが膝裏位まである綺麗系のイケメンの兄ちゃんが隣に座ってた。なんか目の色も金色で、いかにもファンタジーに出てきそうな感じ

の。
鎧みたいの来てるし。袖にヒラヒラも付いてる。見た目も服も貴族
みたいな人だ。

ついでに周りは一面真っ白。下はふかふか。

雲の上のような場所だ。あ、死んだから天国か。

そんなことを考えてたらイケメンのお兄さんが優しげに声をかけて
きた。

「おう、眼が覚めたかのう。」

見た目より年か？この人。声に少年っぽさを感じない。ついでに言
葉遣いも。

顔はイケメンなのに残念だ。

心配そうに顔を覗いてる優しいお兄さんに失礼な感想を抱く。
というか

「ここは？あんた誰なんだ？俺はしんだのか！？」

なんかさっきと同じこと聞いているかも。

だめだ、めっちゃ混乱しててわけわからん。

観察は冷静に出来るのに、…何故だろう。

「お、落ち着け。一先ず深呼吸だの」

まくし立てたような俺の言葉に驚きながらも深呼吸を促してきた。
なんか普通に良い人だ。

やってみた。

すーはーすーはー。

お？ちよつと余裕ができたかも。

「落ち着いたかのう？」

こくりとうなずいて、身体に力を入れる。全体的に軽い痺れがある
のか上手く入らない。

「さて、質問についてだが、まず僕はアレウスという。みなはアレ
ウスと読んどつたな。して、ここはそなたの中じゃ。ちなみにそなた
は死んどらんよ。」

自己紹介を簡単に済ましたアレウスさんはよくわからないことを言
った。

待つて欲しい。理解が追い付かない。

「は？中？身体のか？それに死んでないって」

マズイ。わけわかんねえ。頭痛くなりそうだ。

「フム。なんといえよ…。あ、そなたの中とは身体ではないぞ？そなたの心、精神の中だ。」

ホワツツ？SEI SIN？ナニソレ美味しいの？
ふざけた感じだが本心だ。勿論。

「は？」

「むー。そうなの…。今そなたは夢の中に居るような感じた」

これならアレウスさんが再三教えてくれるのが申し訳ない。

さっき夢見てたよな俺…。
まあいいか。わかりやすいし。

「なんとなくわかった。つまり俺は生きてて、今は寝てると」

「いかにもだのう」

アレウスさんが肯定した。いちいち見た目と言動が噛み合わないなこ

の人。

「んであなたは？俺の記憶にはアレウス「アレスでよい」…アレスさんなんて人はいないけど…」

一番気になるのはここだ。俺にアレウスさ…じゃないアレスさんの記憶はない。

だがここは俺の中。何故居るんだこの人。

「ここにいるのは俺が肉体を持たぬから。そしてこっちで生きる為の術をそなたに教えるからじゃ。あまり長くは居られぬがの」

「こっち？肉体がないって？まさか…っ!？」

さらっと言われた言葉を処理出来なかったので口に出す。思い至った結論は信じられなかった。

「そのまさかだの。俺は死人じゃ。だからそなたの中にある。こっちはそなたの居った世界とは違う世界のこと。まあ異世界といったところだの。」

フム。俺は異世界にトリップしてきたと。成る程わからん!!

というのは置いて、本当に意味がわからない。あの時俺はトラックにはねられたのに。痛みも血がなくなる感覚も確かにあったはずなのに。思い出したくない記憶に背筋が凍る。それよりも

「異世界？冗談だろ…」

信じたくは無い。嘘だと言って欲しい。

「悪いが…冗談ではない、の」

気まずそうに、だがはつきりと俺の言葉を否定した。ショックだった。なんだかんだいっても俺はあそこが好きだったから。

「スマンのじゃ…。」

長い金の三つ編みがだらんと頂垂れている。この人が悪いワケ無いのに。

「別にあんたが悪いんじゃないだろ？謝るなって」

なんか罪悪感が込み上げてきた。どうしようか。

「なあなあ。この世界のこと教えてくれんだろ？気落ちしてないでな」

何故か俺が励ます側になっていた。

「…」

無言だが嬉々とした様子でぶんぶんと頭を降るイケメン。ちょっとシユールだ。でも暗い空気は無くなった。よくやったぞ俺

「そ、そうだのう。あまり時間も無いゆえ、生きる術だけでも…」

「時間無いのか？」

「ウム。」

「はじめて聞いたんだけど!？」

「そっき言ったぞ。」

聞いてなかった。

でも生きる術ってなんだ？まさか魔法とかじゃ…！だったら嬉しい。

先ほどのシヨックも忘れ、テンションが上がっている俺。
自然と顔がニヤケる。

「む？どうしたかの？急にニヤケて。」

「いつ、いえなんでもないですー！」

聞き方は穏やかだが引いている。
マズイな。アレスさんは男とはいえ綺麗な人だ。引かれるとけっこ
うなダメージを受ける。

「まず僕らの世界では魔力と言うものがあってだん「キターー！」
…どうした！？「いえなんでも」それは人の中に大なり小なり必ず
あるものなのじゃ…」

今度はドン引きされた。心が折れそう。奇声を上げてごめんなさい。
でも仕方ないんです。魔法なんて絶対一度は使いたいと思うんで。

アレスさん曰く、魔力は誰にでも有るもののような。だけど、それ
をよくあるイメージの魔法みたいに使える人は限られてくるらしい。
一応俺は使えるようだ。よかった。

んで魔法を出すには触媒となる道具を使うらしい。杖とか剣とか。触媒の質がいいと魔力の少ない人でも魔法が使えるようになるようだ。増幅作用によって基礎魔力が底上げされるらしい。

「だが魔力は有限だ。そして疲れる。道具に頼らねば魔法を使えぬ者は特にな」

成る程。体力を使うのか。まあ当たり前だよな。

てか爺言葉じゃないアレスさんかっけえ。

まるで王様みたいに威厳に満ちてる。そんな感じだから、自然と背筋が伸びて敬語で話さなければいけなくなりそうだ。

「だが魔力の底上げが必要無い者にも道具は必要だ。解るか？」

「…いえ。解らないです。何故ですか？」

いきなり言われても見当もつかない。考えて同じだろう。

まだ痺れの有る首を横に二、三度振った。

「強すぎる力は加減が難しく使いすぎてしまうのだ。それは肉体的にも精神的にも負担は大きい。だからこそ道具を使い抑制するのだ。

「
理屈としては理解できるがいまいちなつとくできない自分がいる。
でもここらへんは使ってみたら解ると言っていたので置いておこう。」

「そして魔力には属性というものがある。大きくわけて、火、水、
大地、風、光、闇、極稀に無属性、の七つがある。人にはそれぞれ
もつ属性が異なるが、持つ触媒によっては使用することも出来るの
じゃ。」

口調が戻った。先ほどの自分の口調に気付いたのか、慌てて元の爺
言葉に戻した。こうして聞いてみると少しばかりわざとらしい。

47

「回復とかはありますか？」

物語とかだと一番重要なところだ。気になる。

「回復かの？回復は無属性扱いされるのう。特別な才がなければ使
えんがな。こればかりは道具でも駄目だの。他の属性と合わせての
補助も可能じゃ。身体能力を上げるとなのう。旅をするなら必要に
なるの。」

さっきとはまるで別人だ。さっきまでであった威厳は綺麗さっぱり消えている。

「なるほどー。」

アレスさんの言葉を頭に叩き込む。

けっこう知っていることもあるが細部が違う。

まあ当たり前だが。

入れた情報を元から持っているちよつとした知識に上書きしていたら

「わかったかの？して魔法を使ってみるぞ。」

アレスさんの発言に反応が遅れた。

「へ？だってやり方まだだし無理では？。」

いきなりなんだ？

「まずは「てっ、ちよつと待て」「手の平に力を集める。」

ダメだ聞いてねえ。

えっと力を集めるのか。

くそつ。腕が重い。

四苦八苦しながらもいわれた通りにする。

「そして出したい物をできるだけ現実的に想像するのじゃ。例えば火とか。出すものに名をつけると想像しやすい」

こんな感じといって手から火の玉のようなを出した。

「二つか!？」

ポツ!と火の玉が出た。

「フム。まだまだ改善の余地有りだが。初めてにしては上出来じゃ。まあこれで魔力の感覚を掴めただろう。」

と評価をもらった。及第点といったところだろう。それよりも魔法が出たことに吃驚だ。嬉しい。

ん？

途端に身体中から痛みが走る。

「…っ！頭痛え…」

だけどそれよりも頭痛がひどい。

「もう時間かの…」

ポツリとアレスさんが言った。

俺の身体が光りはじめた。

「時間って…。つうっ！」

頭が痛い。思考が鈍る。何も感じない。痛みだけを感じる。

「…最後にそなたの名を聞いても良いか？」

アレスさんが控えめに言ってくる。そういえば俺は名乗っていない。俺はぼんやりする頭で言った。

「く…黒斗。鷹羽、黒斗です。」

「クロト…。良い名だの。」

俺の名前を聞いて優しい笑みを浮かべた、アレスさんが頭を撫でた、気が…。した。

そこからは覚えていない。

眼が覚めたら雲の上（後書き）

今後は主人公の名前がカタカナになります。
次は主人公が空気です。

日常からの旅立ち（前書き）

やっとだせたよ。しかし主人公が空気のまんま（笑）

日常からの旅立ち

またいつもの夢。優しく懐かしくて哀しい夢。
幸せな光景から感じた感情は様々だ。
でも一番大きな気持ちは愛しさで

「……………何なんだよ？わけがわからない」

教えてくれ。そう呟いた震える声は静寂に吞まれ消えていった。

「リンクお兄ちゃん起きて〜！早くご飯〜」

腹の辺りが重い。いつもの朝だ。

「お…降りて。起きらないから」

リンクは腹の上で笑う子供にうめきながら言った。

「はい」

いい返事で降りる子供を優しく眺めて聞いた。

「ご飯ってセツカさんは？」

ここはグリーンという町にあるリベア孤児院という国立の孤児院だ。セツカさんとはその管理人である。

「お姉ちゃんは朝からいないよ」

そつえばそうだった。

昨日言われていたことを思い出す。

「ごめん。すぐつくるからさ。先にいって準備してくれる？」

わかった。と響く子供の声に微笑みながらクローゼットを開けた。

食堂では何かが焼ける甘いいい香りがしていた。

「ほいつ！出来たからお皿持って並ぶ」

フライパンをひっくり返しながら声をかけるリンク。

我先にと並ぶ子供達に苦笑しながら、焼けたパンケーキを皿に乗せていく。冷めてくると美味しくなくなることをわかっている子供達は、乗せてもらうと好きなソースを手早くかけて食べ始めた。

全員分のパンケーキを焼き終わるとエプロンを外して空いている席についた。

「リンクお兄ちゃん。今日のケーキおいしい！」

隣の子がリンクを見て満面の笑みを浮かべて言った。

「そう？今回は少し材料変えてみたんだ。美味しかったならまたこ

れで作ろうか」

なんでなんでとキラキラとした瞳に尋ねられ材料のことを話す。

ああ。そういえば少し余った材料はどうしようか。

「やったあ！」

今にもぴよんぴよん跳ねそうなくらい嬉しそうだ。そんなに喜んでくれるならいくらでも作りたい。

「おにいちゃんはたべないの？」

喜んでいる子供の隣の子が聞いてくる。喜んでる子よりも少し小さい子だ。

「僕甘い物はあるより好きじゃないからねー。」

パンケーキはちょっとねと苦笑する。

「ふーん。じゃあなにたべるの？」

きょとんとしながら聞いてきた。

「んー。コーヒーかな」

「おなかいっぱいなの？」

「ん。そんなとこだね」

子供の質問を軽く流しつつ、席を立ち上がりコーヒーを淹れる。何

も入れないブラックコーヒーだ。熱いそれに指を振って冷ます。一
気に飲み干した。

「お皿はきちんと当番の子が洗うんだよ？」
カップを流し台に置きながら言った。

『は〜い』

いい返事だった。わかっているかは置いておいといて。
もう一杯飲もうかな。そんなことを考えて

しばらくしてあらかたの子が食べ終わったようだ。

「ねえ。お兄ちゃん。」

「んー？何？」

その様子をボーッと眺めていると不意に声をかけられた。十歳位の
女の子だ。

「来週にお兄ちゃん騎士様になるんでしょう？だから…ハイツ！皆で
買ったんだよ！」

「なるっていうか試験受けるだけなんだけど…。皆でって、あの少
ないお小遣いで？」

大切にしておくと渡された箱を見ながら聞いた。
この子達のお小遣いは本当に少ない。縁日で一つ物が買える位の額
しかももらえないのだ。

「そつだよ？ねえ早く開けてよ。お兄ちゃん」

わくわくとした声に背中を押され蓋を開けた。
中には

「緑のペンダントと…扇子？」

なぜか二つも入っていた。

「うん。皆で二つまでに絞ったんだけど…。意見が分かれちゃって。だから二つなんだよ！」

と理由を教えてくれた。

二つとも魔力を帯びている。魔力を帯びている装備品は高い物が多い。きつとこれ等も安くは無かったはずだ。たぶん選べなかったなんて嘘だろう。

子供達の気持ちをはしひしと感じて胸が熱くなった。

「ありがとう。大切に…。でも何で扇子？」

震える声で礼を言う。だが疑問はここだ。

「その扇子が綺麗でお兄ちゃんに似合いそうだったから！あとなんかねえ不思議な力が有るんだって！」

「……」

大した理由では無かったが、似合いそうというのは気になる。

リンクはパツと扇子を開いてみた。

扇子は深い蒼に銀色の綿毛の絵がちりばめてあるものだった。

一体何処が自分に似合いそうなのかわからないが、落ち着いた感じのデザインが好みだったのでより嬉しい。

「うん。気に入ったよ。ありがとう。」

リンクは満面の笑みを浮かべた。

「…っ！大切にしてね！」

孤児院の子供達はその笑顔を見て一瞬止まってから皆嬉しそうに笑った。

それから数時間後。

リンクは馬に乗って町を一つ超えた草原に来ていた。草原の遙か遠くにはうっそうと茂る森が見えた。この森を超えると来週にある騎士団試験の会場であるリベア城があるのだ。

リンクはその城の下見に来ていた。

「…遠い。遠すぎる。街一つ超えるより草原超える方が遠いってどういうことなんだ……。一体」

ぶつぶつと文句を言いながら馬に水をやっている。どうやら休憩中
のようだ。

しばらくたって馬が浮かした水の玉から首をどかした。

「もういいのかい？じゃあ行こうか。」

パチツと指を鳴らして水を落とす。

それから優しく馬の鬣を撫で鞍に飛び乗った。手綱をとり器用に操
る。

そのままヒンと鳴いた馬は颯爽と走り出した。

一時間後

何度か休憩を挟みつつもようやく森の入口付近までやって来た。流
石に森に馬は連れて行けないのでどこかに繋いでおこうと降りて辺
りを見渡す。
少し先の所に二人の少女がしゃがみこんでいた。何事が言い会って
いる。

「喧嘩かな……？」

よく見ると彼女達の周りの草が赤く染まっていた。
ふと向かい風が吹く。濃い鉄の臭いがした。

「……………！？これって……！」

馬も放つて少女達の所に走った。

「あの！どうかしたんですか！？」

どうやらもう一人少年がいたらしい。二人の少女は重傷の少年を治療しているようだ。

バツとこちらを振り向いた眼鏡をかけている少女が

「すみません！力を貸してください！！！」

と懇願してきた。

治癒魔法を使っている方の少女はリンクに見向きもしないで傷に集中している。

「なにをすればいいんですか！？」

すぐに魔法を使っている少女の隣に駆け寄り、しゃがみこんで尋ねた。

「彼女の手に乗る自分の手に乗せて下さい！早く！魔力が足りない……！」

返事もせず手を重ねる。途端に力が抜けた。自分の魔力が物凄い勢いで吸われるのがわかった。

この感覚に慣れてきて、ふと隣の少女に目をやる。

思わず目を見張る。彼女の長い金髪にひどく見覚えがあった。だが何故かはわからない。

「……？」

しばらくして金髪の少女の手から光が消えた。

「これで大きな傷は粗方治った筈よ！骨とかはよく分かんないけどね」

大量の汗を拭いながら晴れ晴れとした笑顔で言った。

「アンタ。助かったわ！私はルミ。アンタは……！？」

どうやらリンクがいることはわかっていたようだ。自己紹介をしながらリンクを見て不意に言葉が止まった。

「ルミ？失礼ですよ。あの、私はミミと申します。先ほどは助かりました。」

固まったルミを注意しながら自己紹介をしたミミ。

まあ固まるのもわからないわけじゃない。だってミミも少し驚いたのだから。

リンクは少しくセのある長い銀髪に深い海のような瞳を持つ、中性的な美しい容姿をしている。そしてどこか幻想的だ。

自分は切羽詰まっている時だから平気だったが普通の時だったら、

ルミと同じ反応をしたと思う。

「僕はリンク。リンク・エルヴィンです。お二人は彼とは？」

自己紹介を簡単に済ませて眠っている少年のことを訊ねた。

「知らないわ。森から出た時には倒れたし。」

「…森から？そんなんですか。じゃあ名前も知らないんですね。」

ルミの森からという言葉に気がしながらも確認する。

「にしても。変わった格好の方ですね…。初めて見ました。すーつでしたか？それに似ていますね。」

「ああ。あの異国のね」

確かにとミミミの言葉に同意する。双子は何処かで似た服を見たようだった。

そう。少年は紺を基調とした服に赤のネクタイをした所謂ブレザーを着ていた。

「でも、どうやってできたんでしょう？この傷。」

「見慣れない傷よねえ。魔法かしら」

服もそうだが傷にも疑問が残る。まるで鉄の塊に物凄いスピードでぶつかったような傷だ。

血塗れの少年を囲んで話し合う（見た目）美少女達。なかなかシュールな光景だ。

「これって………っう！」ちょっと 안타大丈夫！？まだ起き上が
つちや駄目よ！」

何かに気付いたのかルミが口を開いた時、ぴくりとも動かなかつた少年が目を覚ました。

日常からの旅立ち（後書き）

リンクさんの口調が敬語だとミミさんの口調とかぶってわからないかも。

ああ、書き分けが上手くなりたい。文才が欲しい

眼が覚めたら草原に（前書き）

主人公がやっと出た…

眼が覚めたら草原に

か、身体が痛いし寒い…最悪だ。あ、頭痛は無くなったか。てか生きてるといのかただ死んでないだけのよう…。恨むぜ。アレスさん……。

ん…なんか温かい。寒気がとれてく。

なんだろうか……？
優しい光が見えた。

「……つう！」

眼が覚めた瞬間とんでもない激痛が俺を襲う。どうやら夢で身体が重かったのは現実で重傷だったからみたいだ。特に左足は折れてんのか感覚無いし。

俺は起きようと身体に鞭を打って力を入れた。

「ちよつとアンタ大丈夫！？まだ起き上がっちゃ駄目よ！」

切羽詰まったような声と顔で覗き込んできた金髪で金目の美少女。なんか見覚えあるな。

どこだっけか。懐かしいけど最近またどっかで見たような…。ダメだ、思い出せん。

てかここ現実か。身体痛いし当たり前か。

「……っ！な、なあっ！ってどこ？」

あれ思ったよりスムーズに声が出た。

意外と俺って丈夫？あの事故で死ななかったわけだし。

「ここはリベア城郊外のリベア平原ですよ？」

ハッ！自分で質問しておいて現実逃避してた。

金髪の子とはまた違った中性的な綺麗な声だな。声の方へ向こうとしたら首が痛すぎて回らない。そしたら桃色がかった茶髪に綺麗な緑の瞳の美少女が覗き込んできた。金髪の子に少し似ている。

姉妹かな？

どこかちょっとわからなかったので、もうちょい詳しく質問しようと口を開いたら身体中が痛くて喋れない。さっきのはなんだったんだ。あれか。ミラクルか。

即死もんの傷は癒えてたからこの子達が治してくれたのか？

「悪いけど、外傷しか直してないの。身体のとこが痛いか教えて。」

と金髪の子が言ってくる。だからか。筋とかめちやくちや痛いので。

っーことはこの子治療魔法使えるのか。いきなり珍しい人に会ったな。

うーん身体の痛いところか……。

「…く、首と左足と背中」

頑張っ て 声 を 出 す。 凄 く 痛 か っ た。

「ん、わ っ か っ た。」

軽 く つ な ず い て そ こ に 手 を 当 て る。 さ つ き の 温 か さ を 感 じ た。

「…： 魔 力、 足 り な い の で は？」

「あ あ。 さ つ き 僕 の 魔 力 あ げ た ん で す。 あ の ま ま じ ゃ ル ミ さ ん が 倒 れ て し ま い そ う で し た か ら」

「なるほど。」

よ く わ か ら な い 会 話 を し て い る。 一 人 は 知 ら な い 声 だ。 さ つ き 黙 っ て い た ん だ ろ う か。 声 か ら し て 若 い 男 み た い だ け だ。

少 し た っ て 俺 は 立 ち 上 が れ は し な い が 身 体 を 起 こ せ る よ う に は な っ た の で、 と り あ え ず お 礼 を 言 う こ と に す る。

「え え つ と。 あ り が と う。 助 け て く れ て。 俺 は 黒 斗。 鷹 羽 黒 斗 だ。 そ の…： よ ろ し く。」

つ い で に 自 己 紹 介 も。 ち ょ っ と 照 れ く さ い な。 こ れ。 だ っ て 目 の 前 の 三 人 と も ス ゲ ー 美 人 だ し。 男 も い る が。

「ふーん。 ク ロ ト か。 ア タ シ は ル ミ。 別 に 気 に し な く て いー よ。 勝

手にやったことだしねー」

軽い調子で笑う金髪の美少女はルミ。
勝手にとって…、いい奴だなこいつ。

「私はミミと申します。よろしくお願いします。クロトさん。無事でよかったです。」

ほっとしたような笑みを浮かべた茶髪の美少女はミミ。物静かな雰囲気
が少し母さんに似てるかもしれない。
少しそわそわしているが、どうしたんだろう。

「僕はリンク。よろしくね。クロト君」

最後は銀髪に青紫色の瞳が凄く綺麗な奴。男だけど。居るんだな男
の美人って。

銀髪に暗い青系の瞳か。なんか珍しい。ん？どっかで見たような…？
てかなんだ？最近俺の周りで美形のインフレが起きている気がする。
こいつ等しかり学校の奴等しかり…。

そんなことをつらつら考えてたら、かけられた声に気付かなかった。

「あの。あのクロトさん？」「あつごめん！」「…ところで何故貴方は
こんなところで倒れていたのですか？」

ミミが丁寧な口調でストレートに聞いてきた。
回りくどく聞きそうだったからちよつと意外だな。

『それは僕もアタシ気になる』

見事なシンクロだ。

「話せば長くなるんだけど」

かいつまんで事のあらましを話そうとしたら
「ならいいわ」

バツサリと切られた。泣きそうだ。

「ルミそんなにはつきり言っでは失礼でしょう。…ですが急いでいる身ではありますし…。長いのはちょっと」

と言ってキョロキョロと辺りを見渡している。それを見て何か察しらしいリンクが

「…とりあえず歩かない？」

もっともである。

カポカポと馬の足音が聞こえる。日常にもあつた音だからちょっとだけ寂しい気持ちになるな。

今俺達はリンクの乗っていた馬を連れて草原を歩いている。

「こ、これが馬…!」

「クロトさん。足は平気ですか?」

「ルミさん。あんまはしゃいじゃ駄目だよ。吃驚しちゃうからね」

まだ左足が動かない俺と治癒魔法の使用で疲れてるルミが馬に乗っている。乗馬というか馬見るのも初めて、といった感じのルミが微笑ましい。

ミミは俺達が落ちないように横から支えてくれていて、リンクは手綱を引いて馬を先導している。

ちなみに俺は左足のせいで跨がれないので馬に腰掛けている状態だ。足は馬に当たらないように、と空気の膜のようなものでミミに固定してもらってある。

魔法にはこんなものもあるのかと驚いた。リンクも吃驚していたのでかなり高度な事なのかもしれない。

……しかし暇だなあ。

「なあ。ミミとルミって姉妹なんかか?」

景色を見るのも飽きてしまったのでとりあえず気になる事を聞いてみた。

「し!姉妹!?!」

あれ?違ったかな…。

「違うんですか?」

リンクも驚いている。

「違います!!」

顔を真っ赤にして怒鳴ってくる。失礼かもしれないが可愛らしい。

「従姉妹とかかな。ね、クロト君」

それならばと俺に振ってくるリンク。

同じ気持ちだったらしく小声でかわいいとか言っていた。

あ、やっぱりそう思うよな。

「うーん……?」

「なんだろーねえ?」

「アツハハハ! ちよっ、ちよっと姉妹って! 姉妹ってさあ!」

二人して首を捻っているところルミが大笑いしていた。

「……そんなに笑わないでください。」

「ぶふっ! でもさー、アレじゃない? 皆が間違えんのも無理無いって。アンタ美人だしさ」

「……」

『間違える?』

何をだろつか。ミミは物凄く不機嫌でルミは物凄く上機嫌だ。

「ミミはーアタシの双子の兄貴なのよ。」

『……は？兄貴？』

おかしい、いつ俺の耳はイカれたんだろうか。聞き間違いだと信じたい。

「冗談ですか？あまり笑えませんが……」

まったく同感だ。

「じよ、冗談等ではありません！私はれっきとした男です！」

『マジで？』

「ホントのことよー」

マジイ。よく理解できない。リンクに至ってはキャパオーバーしてんぞあれ。頭から煙出てる。

てか男って……。ホントについてんのかこいつ。

「……ハッ！？」

お？リンクが戻ってきた。意外と早かったな。よかったよかった。

「でもさー、混乱すんのもわかるけど別にいーじゃん。ミミは可愛
いってことで。男とか関係無く。」

確かにそう考えりゃあいいのか。なら納得だ

「確かにそうかもしれませんね。」

リンクも納得したようだ。

ルミはきつとミミが大好きなんだろう。笑いながら言ってるけど顔が少し真剣みを帯びている。

…羨ましいな。アイツみたいになうざったい奴と違って。

「もう。可愛いのはルミでしょう?」

ミミの発言に驚いた。こいつ等あれか。ブラコンでシスコンなのか。仲いいな。

「仲良いんですね。」

「おうよ!ミミは私のだもん」

ルミも楽しそうだ。

リンクが微笑ましいといった表情で二人を見てる。何か見覚えあるような光景だな。どこだっけ?

「そ、そんなことより!クロトさん先ほどの質問に答えて下さい!」

無理矢理話変えてきたな。凄い勢いだ。

「あ、ああ。そうだな

どこから話そうか。

先ほどの楽しげな空気は無くなっていて、少しだけ緊張しながら俺

は口を開いた。

眼が覚めたら草原に（後書き）

次は違う人視点から始まります

クロトの話(前書き)

始めはミニ視点です。敬語だったりそうじゃなかったりします。

クロトの話

S a i d - M

「そのさ……。笑わないでくれよ？」

と、クロトさんは不安そうに呟いた。先程の明るい空気は、どんよりとしたものに変わってしまった。

軽々しく話を変える手段にしまったことがとても申し訳ない。

笑うなんてそんなことは絶対しない。

でも、どんな言葉をかければ良いのかなんて見当もつきません。

なんと言えば彼は信用してくれるのでしょうか？きつとあの子なら悩むなんてしないのに。

「なんで笑わなくちゃいけないの？どんだけ変な事でもそんな顔してる奴前にして笑えるわけ無いって。当たり前でしょ？ね、二人とも。」

「ルミさんの言う通りだよ」

真剣な声でルミが言って馬から降りる。その言葉に頷くリンクさん。それを見てクロトさんは安心したような表情になった。

何故あの子は自分の言いたい事をはっきりと伝えられるのでしょうか。
羨ましい

このままでは思考が嫉妬でどす黒くなってしまうそうです。

ああ、なんて情けない。

「えっとさ……。俺、この世界の人間じゃないんだ。所謂異世界人って奴らしい」

クロトさんはどこか吹っ切れた表情で言った。

異世界か……。童話みたいに不思議な話です。

でも、彼は目覚めたばかりなのにそのことをご存知なのでしょうか？

「前の世界で子供を庇って崖から落ちたんだ。大怪我してて、ああ絶対死んだな俺って。眼が覚めたらここにいたんだ。」

崖から……。あの傷は落下だけではない気がします。何かにぶつかったんだろうか？

そんな疑問よりも謝らねばいけませんね。

「そう…でしたか。軽々しく聞いてしまっただけで申し訳ありません。」
「気にすんなって。知らなかったんだしさ。それに聞いてもらって楽になった気がするしな」

笑って頭を撫でてくれたクロトさん。きつと不安でいっぱいだと思います。でも、そこで笑える彼はとても強い人なのかもしれません。頭を撫でられることに少々顔が熱くなりましたが、彼に笑顔でお礼を言った。

久しぶりに自然に笑えた気がします。

ギョツとした顔でルミが、どことなく顔を赤くしたクロトさんが私を見ていたのだけれど、なぜなのでしょう。

「ところで、なんで君って起きたばかりなのに今の状況がわかるの？」

何故彼がこの世界に来てしまったことを知っているのか。それをリ
ンクさんが訊ねていた。

クロトさんは眼が覚める間に起きたことを話してくれた。
一言でまとめると

「あんまり意味無いですよね…。その方のお話は」

失礼かもしれないが事実だと思います。

「やっぱそつだよな…」

「魔法の基礎知識と状況のみつてね…」

「逆に混乱しそつだねー」

『……………』

しばらくの間沈黙が降りる。カポカポと馬の足音だけが辺りに響く、
微妙で気まずい空気だけが続いていきました。

(どーすんのよコレ！さつきより空気が重いんだけど！?)

ルミが目線だけで話しかけてきました。どうやら意見は同じのよう
です。

(なんとかしてよ！ミミっつてば！)

(いやいや無理ですって！)

私にそんな能力があるならとっくに使っているでしょうに。

(リンクは空気読めてないし！)

リンクさんの方を見ると、何か考えいるのか下を向いています。なるほど確かに役には立たなそうですね。

考えことが終わったのか顔を上げたリンクさんが口を開いた。

「じゃあ君はこれから帰る方法を探すの？」

重要なことだけど話が飛んでいる気がします……。でも確かに彼はどうするのだろうか。

あ、そういえばこれから巡る国に知識の国とか言われている国があったような…

s a i d - k

これから？帰る方法かを探す、か。そういや考えて無かったな。

「どっやって探そう、ねー。片っ端から図書館とかの文献漁んの？」

「それが妥当だよな…」

でもこの国の文字とか読めないよな俺。それにこの国にあるとは限らないし。世界中を回るのは骨が折れそうだ。

「なら…」

ミミが何かを呟いている。何か考えがあんのか？

「なら、我々と共に来ませんか？」

「「へ！？」「」

ミミの考えは俺の斜め上だったようだ。ルミも予想外みだし。てかこいつ等旅に出んのか。

「なんでそうなの！？ミミ！」

ルミが食って掛かる。まあそーだよな。

「何故って…。彼が探すのは様々な文献でしょう？ならば私達の旅に同行して世界をめぐっていた方がいいでしょう、彼は文字が読めないだろうし。誰かがいないと」

ミミの言葉は物凄く助かるし、世界を巡るなら好都合だ。字は読めないし、国の事もわからないから。ただで出会ったばかりの奴を同行させるのはどうなんだ？ルミも納得がいかないらしい。

「だからって連れて行くにはいかないでしょ！？クロトは一般人なのよ、危険じゃない！」

あれ？そっち！？なんだこの双子は…。お人好し過ぎるだろ。

「彼は私達で守ればいいでしょう。それにクロトさんにはなかなかの魔力が有るようですから、正しい知識さえあればきっと強くなれます。」

マジで？なかなかって嬉しいな。

てかミミって思った以上に頑固だな。

しっかしなんでそこまで？俺、もしかして気に入られた？

「なんでそこまですんの？確かに同情するのも解るけどさ、だからって連れて行くのは違うでしょ！」

あ…同情か。…そうだよな。期待しちゃ駄目だよな…

ヤベ、少し沈んできた。

「クロト君？」

リンクが声かけてきた。この人案外空気読めねえな。

「顔色悪いよ、大丈夫？あとね、ミミさんは同情で言っているんじゃないよ。」

だから安心しなよと双子に聞こえない位の声で言ってくる。ほんのり微笑んで。

宣言撤回。普通に空気読めてるよこの人。

「ありがと、リンク。なんかちょっと沈みやすいみたいでさ…」

情けねえなーホント。

「気にしない気にしない、ね？」

リンクの笑顔はなんだか懐かしくて安心する。たぶん知り合いに似ているんだ。

「同情なんてしていません。私が彼についてきて欲しいんです！
まだやっていたらしい。

ついてきて欲しいって…、マジか。

ミミが物凄い勢いでルミに言っている。

どこかルミが淋しそうなのは気のせいか？

「もう！わかったわよ！！好きにしたらいいじゃない！」

ルミがあきらめて叫んだ。

てか俺の意見は聞かないのか。…まあついていけるなら行きたいけどわ。

「あ、ルミさん切れたね」

リンクはどこか楽しそうだ。お気楽な人だな！。

「っルミ！ありがとうございます！！」

おお、ミミがスゴい笑顔だ。俺ってそこまで気に入られてんのか。
美少女に（男だが）気に入られるなんて嬉しいぞ。

「えっと、ミミありがとうございます。ルミも。これからよろしくな！」

旅に同行出来るようなのでとても心強い。

「「ちらちら、ですね。」

「まったく…。ま、よろしくねクロト」

ミミは嬉しそうにルミはダルそうにしながらも俺に言ってきた。

「ん？」

ふと、さっきとは違う風が吹いた。前を見ると緑じゃないレンガ作りの地面が視界に入ってきた。

リンクが少し目を細めてレンガの地面を眺めながら口を開いた。

「話は終わったの君達？話している間に平原も抜けそうな所まで来たよ。これからはどうするの？」

そっか。双子は一緒だけどリンクは違うんだよな。

「私達は首都ブランカを越えて緑の里グリーンに行くつもりです」

「え？なんでよ、グリーンって遠いじゃん」

地名はよくわからないけど、まあようするに町をひとつ越えるのか。

「だからこそです。城下町では見つかる可能性が高いし」

ああ、こいつ等ってやっぱし貴族なんかか。んで家出したのか。さっきからキョドってたのもそれか。

「グリーン？なら僕もだよー」

リンクも一緒か。なんか偶然ってスゲー。

「リンクも？ならまだ一緒に居られんの？やった！」

ルミがはしゃいでる。やっぱりこいつって見た目と中身が違つよな。

「リンクさん。グリーンまではどのくらいかかります？」

さっきまでの笑顔が嘘みたいに真面目な顔でミミが訊ねている。

「そうだね…この平原を抜けるよりかは近いよ。」

リンクが遠い目をして言った。なにかあったのか？

「なら、急ぎましょうか。ブランカは午後からは人が増えますから」

そう言って俺達は足を速めていった。

クロトの話（後書き）

クロト視点が難しい。価値観の違いとかだせない。

孤児院にて 1 (前書き)

難産でした。いろいろと

「ご飯だよー！」

リンクの声が階下から聞こえる。

元気な返事とともに慌ただしく階段を降りていく複数の足音が響いた。

ここはリベア孤児院。リンクがグリーンに来るなら泊まっていけと言ったので、俺達はお言葉に甘えることになったのだ。

現在、俺達は洗濯物をたたんでいる。ただで泊めてもらうのは悪いので何か手伝わせて欲しい、と言ったのはミミだった。

「意外に上手いな、二人とも」

「このくらいは出来ませんとマズイでしょう？」

「流石にこのくらいはねー」

ミミもルミもなかなか手際が良い。お嬢様にそんなこと出来んのか？と疑問に思ったがいらぬ心配だったみたいだ。

「血塗れのお兄ちゃん達、ご飯だよー」

「今行くー！」

階下から元気いっぱいといった子供の声が出た。

そしてルミが子供に負けなくらいに元気な返事をした。あいつ元気だなー。

ちなみに血塗れの〜とは、俺達三人ともが血塗れだったからだ。勿論俺の血で。孤児院に着いて、子供達に挨拶をして握手を求めたら泣いて拒否されたことは記憶に新しい。特に俺なんか顔が血と泥でぐちゃぐちゃで顔立ちがよくわからなかったらしい。そりゃ怖いわな。ホラー以外のなにものでもねーよ。

出来れば言っただけ良かったぜ…三人とも。

とりあえず風呂に強制的に入らされた。血を洗い流したら、皆目を見開いて俺を見ていた。なぜだろうか。

とりあえず俺は今んとこリンクの服を借りている。上着は袖が余っているし、下も裾が余っている。…屈辱だ。

しかし俺の制服は大丈夫だろうか…

双子も風呂に入らされたらしい。髪が湿っていたし、旅のしやすそうな上物の服は寝間着のような服に変わった。

「クロトさん、行きますよ?」

観察という名の現実逃避で動かなかった俺を、不思議そうに見下ろすミミ。

ふと俺の足を見て、手を差し出してきた。

「ん、ありがとう」

礼を言っただけミミの手を取る。ふわりと身体が浮いたような感覚がした。

「わっ立てる！？魔法か？」

「ええ、歩きやすいように。驚かせてしまいましたね…。すみません。」

申し訳なさそうに謝ってきた。

どちらかといえばこっちが礼を言つべきだろう。謝られる要素が見つからない。

そのことと美少女に謝られている事が良心に響く。

「吃驚しただけだからさ、平気平気。歩けるようにしてくれてありがとな。」

軽く腕を振って言いながら、ミミを引っ張る。抵抗は無いからきつともう平気だろう。

足が折れてるのに歩けているのもミミの魔法のようだ。いろんな魔法があるもんだな。

「二人ともー！早く来て手伝ってー」

下からくる食欲を誘う匂いとともにリンクの声がした。

「わりい。今行くー！」

「では行きましょうか。クロトさん」

俺はミミに手を貸してもらいながら階段を降りていった。

俺達が降りた頃にはもうほとんど準備は終わっていた。

「結局全部やつてもらってしまいましたね…。」

「あら〜。いいのよ気にしなくて」

誰だこの人？

気まずそうに呟いたミミの言葉に緩い声が返る。さつき出迎えてくれた人たちの中にはなかった声だった。

声の主は凄く綺麗な人だ。漆黒つて表現するのがぴったりなストリートの長い黒髪。同じ色の涼しげな瞳。なんというか…大和撫子って感じた。

でも容姿と声（というか話し方）が合っていない。

「あれ？セツカさん帰ってらしたんですか？」

「ええ。今日は朝からだったから早いのよ〜」

リンクがその美人さんを見てちよつと驚いた声をかけた。フム、セツカさんというのか…。名前も日本人みたいだな。てか喋り方がやっぱし残念だ。ユルユルだよ…。

俺達がセツカさんに軽く自己紹介をしようとしていると、

「ちよつと〜。早くしてよ。せつかく美味しそうなご飯なのに冷めちゃう…、って誰？」

むくれたルミが文句を言いながらこっちに近付いて来た。セツカさんの後ろ姿を見て不思議そうな顔をしながら。

「あ、ルミさん。この人はね、ここの孤児院の管理人のセツカさん

という「ちよっ！！マジタイプな美人さんなんですけど！あのあの、私ルミっていいいます！セツカさんでしたよね！？ご結婚はなされてます？恋人は？まあいたとしても関係無いけど！！略奪愛って燃える展開だよね！！ヤバイ！興奮してきたんですけど！？結婚を前七

「ちよっと待ったー！！！！？お前何言ってるの！？」……方で……

リンクがセツカさんを紹介しようとしたら、ルミがマシンガントークでセツカさんを口説きだしてた。遮られたリンクが哀れだ……。

え？何コイツこんなキャラなわけ？

「何って……、美人みたらとりあえず口説かないと！男だろうが女だろうが……！」

スゲエ……言い切った。

ガツポーズすんなよ。んなドヤ顔で。めっちゃキラキラしちゃってるよ。

隣でルミが深く溜め息をついていた。苦勞してんだな……

「可愛い子ねーこの子も。リンク、お姉さん嬉しいわ。こんな可愛い子が三人も泊まってくれるなんて」

ルミのマシガントークを気にした様子も無く、緩い声で喜んでるセツカさん。それを見てリンクも深く溜め息をついていた。可愛いって俺もなの！？確かにちよっとな顔かもしないけど……、シヨックだ。

それより二人とも大変だな。ツッコミが追いつかねーよ。

「もう！まったく恥ずかしい……。リンクさん、騒がしくてごめんな

さい。普段は良い子なのですが…」

「いや…こつちも大抵ズレてる人だからさ。気にしないで。…良い人なんだけどねホント…」

苦労人二人の会話に切実な思いを感じた。

「美人かー。んじゃリンクも口説いたのか？こいつも美人系じゃんでもさっきのあれを見て驚いてたし初見か？」

「状況が状況だったしねー。口説こうにもできなかったのよ。リンクもクロトも。」

「いや…俺もかよ」

「勿論よ！ま、一番はミミだけどね！見た目も雰囲気もなにもかもダントツね！」

「確かに。ミミって顔とか以前に雰囲気も女性的だよなー」

ミミが女子に見える一番の要因だろう。

ミミを見ながらそんなことを考える。

「そ、そんな話はいいですから！ほらせっかくの夕食が冷めてしまっうのでしよう!？」

顔を赤くしながら、グイグイとルミを食堂の方に押している。

そんなミミを見てルミはにやけている。シスコン？だなー。確かに可愛いけど。

「そっだねー。早く行こっか。ほらクロト君も」

リンクが俺を押しながら食堂に向かう。

「あらあら、仲良しねえ」

嬉しそうなセツカさんの声が後ろから聞こえた。

その声に振り返って見た彼女が少しだけ悲しそうな、
表情を浮かべていたのは俺の見間違いなんだろうか。
だけど諦めた

孤児院にて 1 (後書き)

ルミさんのキャラがやっと出せた。ずっとやりたかったよこのネタ

騒がしい食事を終えた俺達はさっきの部屋 リンクの部屋だったら
しいで各々寛いでいた。俺は部屋に敷かれた一組の布団に座って
いる。

「ん〜、美味しかったー。初めてあんな大勢で食べたけど楽しいも
んねー」

部屋に一つしかないベッドの上で伸びをしながらルミが言う。食事
中の事を思い出しているらしく満面の笑みを浮かべていた。

確かに沢山いたなあ子供達。リンクに聞いたら20人位らしい。

「ええ。大勢での食事は賑やかで楽しかったですね。でもルミ、貴
女は食べ過ぎです。遠慮というものを知りなさい。」

俺と向かい合いベッドに寄りかかって座っているミミが、軽くルミ
をたしなめた。

…当然だと思っ。

「その身体のどこに入ってんだよ…あの量が」

ルミは一人で軽く二十人前は食べていた。

ミミ曰く、個人差は有れど魔法を使うと睡眠や食欲が増すらしい。
要するに疲れるってことだよな。アレスさんも言ってたし。

ミミとリンクはそれが薄いみたいだったけど。

「治療術士は比較的疲れやすい人が多いのよ。私もその一人ってわけ。まあミミは違うんだけど」

ミミの言葉を無視してルミが言った。

「おい、ミミが睨んでんぞー」。

「なるほどー。って、ん？じゃあミミも治療術使えんの？」

「やっぱり双子だから使える魔法も似るのか？」

治療術を使える人は珍しいようだからけっこう凄いことだと思う。

「はい。ですがルミ程強力なものではありません。せいぜい軽い怪我を治せたり補助魔法を使えたりする程度ですね」

「やっぱりルミってスゲーのか。俺の怪我ほとんど治しちゃったし。アレスさんもこればかりは才能だって言ってたしな」

「あーっと、あれね。攻撃魔法を使う人もけっこう疲れやすいみたいね」

人差し指をくるくる回したルミが他人事のように言う。視線はあらゆる方向を向いていた。どうやらミミに誉められて照れているようだ。髪の間から見える耳が赤い。

攻撃魔法か……。沢山魔力を持つてる人しかなれないんだろーな。

「へー。そうなんだなー」

と感心した声を上げた俺の方に、くるくる回していた指を止めたル

ミが

「ってコレ、常識よ？常識。便利だからってバンバン使っちゃ駄目なの。そんなことで倒れても恥かくだけよ？」

いい？と言って指を回すのを再開するルミ。癖だろうか。

どうやらこの世界では魔法は、俺達の世界の電気みたいに一般的なもののようだ。

俺も攻撃魔法使いたいな。やっぱり一度は憧れるだろ。

「常識……。クロトさん。クロトさんは魔法には大きく分けて二つの種類があるのをご存知ですか？」

魔法を使う自分を想像していたら、首を傾げてミミが問いかけてきた。

二つ……。一つはたぶんアレスさんのとこで使った感じのだよな。もう一つって…駄目だ。わからん。

うんうん唸っている俺を見かねてルミが口を開いた。

「…一つは魔力を集中させて行う魔法。日常的に使われるものから戦闘まで、様々な種類と発動の仕方があるわね。

もう一つは大量の魔力と材料で巨大な術式を書いて行う大規模魔法。対した違いは本当は無いんだけど一般的には分けて教えてもらうの。」

おお、なかなか解りやすい説明だ。
どうやら俺の使った魔法は前者だったみたいだ。

「大規模魔法って？」
なんなんだろ。かなり気になるので聞いてみることにした。

「大規模魔法ですか？えと…、例えば、貴方はこちらの世界に来てしまったでしょう？そのように対象物を離れた所に移動させる魔法があるんです。転移魔法といいますが…。それは大規模魔法の一つですね。」

いい例えが浮かばなかったらしく少し悩んでから言った。

転移魔法か。テレポルトみたいな感じか？
ん？俺が来たようにって…。

「…！その転移魔法って奴を使えば元の世界に帰れるのか！？」
思わず身を乗り出してミミの細い肩を掴んだ。

「わっ！？え？あ…確かに…！でも確証は持てませんよ？」
どうやら気付いて無かったようだ。かなり吃驚している。…俺が肩を掴んでるから余計かもしれないけど。

「…ですが、転移魔法の記された術式、そうですね、…転移術式を見つけることが、目的への一番の近道と言えますね」
がんばりましょうね。そう言ってミミが微笑んだ。

にしても希望が見えてきた…。転移術式かー。図書館とかの蔵書にあんのかな…。

「……盛り上がっているとこ悪いけどさ、クロト。」

ルミが釘を刺すように言ってきた。
なぜかちよつと恨めしげに俺を見ている。

「何？」

「術式のことと喜ぶのは解るけど。アンタが知らなきゃいけないのは戦いから身を守る術よ。喜ぶ前に知識を身に着けなさい！」

ビシッ！と俺の方に身を乗り出して、指を指してくるルミ。しつかりとベッドの端を掴んでバランスをとっているところが抜け目無い。

「ああ。わかってるよ」

返事をしながらも自然と顔が緩む。
なんだかんだ言ってる俺のことを心配してくれている。良い奴だな、本当。

「ま、まあホントにわかってんならいいんだけど……」

俺の考えてることを察したのか顔を赤くし、そっぽを向いてしまった。そのまま乗り出した身体を起こそうと腕に力をいれた。だがそれが悪かったらしい。ぐらりとルミの身体が傾いた。

勿論、俺の方に。

「わっ!」「ちよっ、えっ!?!」「危な」

俺は咄嗟に近くの物に腕を回してキツく目を瞑った。

ドサドサツ!と大きな音が響いた。仰向けに倒れた俺の視界に、鮮やかな金色と薄く汚れた天井が広がった。

「いったー!」

と、呻くルミ。俺の目の前に顔がある。もう少し近かったらキスしてたかもしれない。

……少し残念だと思ったのは気のせいだろう…多分。

「ルミ…。近いんだが」

「あ、ごめん!重かったっしょ。すぐ退くから。」

と言って退いたルミ。

異性とあんなに近かったのにルミには照れも恥じらいも無かった。お嬢様とかそれ以前に女子としてどうなんだそれは…。

「大丈夫かー?ルミ」

「アタシは大丈夫だけど…。アンタさっさとミミ離してあげなよ。」

「けっこうマズイ光景だしさー」

ルミが声色こそ軽いが少し低い声で言った。

「は？」

言われたことがわからず間拔けな声を上げた俺。

ルミが退いたはずなのに身体に何か乗っている。

そういえば咄嗟になんか抱き締めたような…。あれ？さっきミニミニの肩を掴んだままだったよな？俺って。

首だけ上げて腕に抱いているものを見る。案の定ミニだった。しかも俺がしっかりと腰回りと肩をホールドしてしまっている。確かに端から見たらマズイ光景だ。

あ、目が合った。

「き、気付いたのなら早く離してください…。うう…痛い…」

何処か痛むのか、眼鏡越しの眼にはうつすらと膜が張っていた。

…なんかいろいろヤバイような気がするのには気のせいだろうか。

「い、今退くから！…！」

パツとミニから手を離す。テンパってて言っていることがおかしくなっているようだ。

「いや…。退けないでしょーよ」

はい…「もっともで」じゃいます。

自分のアホな発言に呆れながら、ミミをどかすために右手でミミの肩に手を置いた。

「ねえ！さっきの音何！？何かあったの……って、あ、そのお、お邪魔だったかな…？」

けたたましい足音とともに、もの凄い勢いでドアが開いたと思ったら、大層慌てた様子のリンクが入って来た。そして部屋を見わたしたリンクが気まずそうに俺から眼をそらした。

「ってちよつと待て。」

「誤解だからね！？これ事故だから！！なあルミ！…眼エそらすなあー！！」

数分後

「…そうなの？誤解かー。ああびっくりした」

必死に事情を説明した俺。

こっちの世界に来た時よりも取り乱した気がするぜ…！

心底驚いたといった感じで目を丸くするリンク。実に遺憾だ。

「ま、まあ誤解が解けて何よりです…」

苦笑しながら言うミミ。先ほどから目を合わせてくれないのは気のせいだと信じたい。

「ねえクロト？いくらアタシのミミが可愛いからってさー。アタシの目の前で手を出すのは関心しないなあ。次やったらブチのめすから覚悟なさい。ね？」

素晴らしく良い笑顔を浮かべているルミ。ね？の強調が超恐いです…。

「…りょーかいでございます！あのさ、ミミごめんな？野郎なんかに抱き締められて。それにどっか痛くないか？」

どう謝っていいかわからない。

しかしとりあえず言えることはルミの視線が刺さりそうなことだろう。

「いえ…。大丈夫です。クロトさんもその…重かったですよね？足とか大丈夫ですか？」

と、心配そうに足を見る。そういえば足、折れてたんだっけか。

「ああ、痛くないぞ？気付かなかったくらいだし。」

「そうですか…。それはよかった」

へらへら笑って足を指す。ミミはホツとしたような笑みを浮かべた。辺りにほのぼのとした空気が漂う。よかったー、怒ってなくて。

「でもあれって端から見たら犯罪だよね」

リンクが楽しそうな声音で言った。

「……蒸し返さないでくれ、リンクさんよ」

そう言った俺の声は自分でも吃驚するくらい悲しそうだった。

「じゅめんじゅめん。ところで何を話していたのかな？」

軽く笑ってリンクが話を変える。どうやら俺をからかっていただけ
のようだ。

「魔法の話よ。」

ルミが短く返した。

「ああ、属性とかのこと？」

「はい、クロトさんには覚えていただくことも多いですし、まずは
魔法の基礎知識からですね」

ミミが明日の予定を言うみたい淡々と答える。

「ふーん。なら僕も一緒にやっていい？基礎とかわかんないし」

「構いませんよ。貴方と勉強を共にするのも楽しそうですし。」
一緒にと言ったリンクにあっさりミミは頷いた。人にものを教える
のが好きなのかもしれない。

「意外ね〜。リンクって頭良いと思ってたのに。基礎も知らないっ
て。」

ルミが少し目を大きくして言った。俺もそう思う。

「魔法は見よう見まねで魔物を倒せるくらいは使えたからね。あんまり支障は無かったかな。それに孤児院じゃ十分な教育を受けるのって難しいし」

リンクが頬を掻きながら苦笑した。

やっぱり十分な教育って難しいんだな。馴染みが無くてよくわかんないけど。

「そうなんですか？それは凄いですね。だとしたら貴方の潜在的な力はとても大きいのもかもしれません。」

ミミはどことなく羨ましそうに言った。

まあ見よう見まねで使えるのって凄い才能だよな。

「確かにねー。それに丁度いいんじゃない？今覚えてあんたが子供達に教えれば」

ルミも驚いていたが、優しく笑ってリンクに提案した。

「…そうだね。そうさせてもらおっかな」

リンクもやっぱり優しく笑ってルミに返す。

やっぱり美人だよなー二人とも。時たま見える残念さがそれをわかりにくくしてるけど。

「なら始めましょうか。まずは

孤児院にて 2 (後書き)

皆さんミミミさんのことは女性として扱っているのです、とわざわざミミミさんの三人称が彼女とかになるけど気にしないで下さい。

孤児院にて

3 (前書き)

リンクさん視点です…。
かなり読みづらいです。

s a i d - L

ちよこんと僕のベッドの手前に座ったミミさんが口を開いた。

「まず始めにですが…お二人は魔法には属性というのが有るのはご存知ですよね？」

ミミさんが確認をとるように僕達に聞いてきた。

…うん。こればかり知ってないとマズインじゃないかな。流石にクロト君も知ってるみたいだね。頷いてるもん。

「では、それぞれの地域や気候で属性魔法の威力が上がるのもご存知ですか？例えば…火山の中なら火の力が強くなるとか」

正直これは知らなかった。首を横に振る。クロト君も同じみたいでほえーだのへーだの小声で言ってる。

そういえば雨の日は炎が出にくかったけ。

そんな僕達（いや僕？）をベッドの端に座るルミさんが呆れた視線で見ている。

「常識よ。てか使ってれば気づくってフツー。それよりミミさあ、いきなりそこから？もっと簡単などこから話しなよ。」

うん。視線だけじゃないね。顔も声もだったね。

でも確かにそうかも。ちよっと順番がおかしい気はする。よくわか

んないけどさ。

あれかミミさんが頭良いからどう教えていいか解らないとかかな。人にものを教えるのって難しいもんね。

「そうですか？ではどこから？」

きよんととしたミミさんが聞き返す。

「発動の仕方とかじゃない？リンクはともかくクロトは知らなそうだし」

知ってる？とクロト君に聞くルミさん。

「まあ、一回だけ使ったから感覚は覚えてっけど…」

言いづらそうに、後半なんてもごもごしてて聞き取れなかった。恥ずかしいのかな？

「でも今は使えない、と…」

「ううっ……はい」

ミミさんがもごもごの部分を引き継ぐ。クロト君からも小さいけど確かな肯定が返った。

「ではクロトさんには後で魔法の練習をしてもらいます。属性を調べるのも一緒に。今は基礎を優先しますね。リンクさんは魔法が使えますから」

クロト君の魔法は後回しになるみたい。まあ知識があつた方が楽に覚えられるようだしね。

いいですかと彼？の目が訴えている。僕達に異論は無いので頷いた。

「では次に魔法の補助となる触媒の話をししましょう。」

触媒？よくわからなくて首を捻る。

ちらりとクロト君の顔を盗み見た。どうやら知ってたみたいであると呟きが漏れている。

あれ？魔法を使ってる僕が知らないのはマズインじゃ…？

「触媒とは、魔法を放った時に肉体への負担を減らしたり、基礎魔力を底上げしたりするものです。杖や剣が主流ですね。あ、勿論触媒ではない装備品だってありますよ？

触媒を用いれば魔法の素養が乏しい方でも魔法が使えるようになります。まあ、ほとんど魔力を持たない人達は別ですが」

魔法が使える、ね。だから武器商隊の人達の商品あんなに売れたのかな。皆魔法が使える方が安心だしね。

「そうなんだー。じゃあ僕の剣も？セツカさんに貰ったものなんだけど…」

ミミさんに部屋に置いてある僕の剣を見せる。

さっきは持っていかなかったけど僕愛用の剣だ。どうなんだろ。

「へー。長いなその剣。腕辛くね？」

「そうだね。片手剣って分類されるものの中でも長いらしいから。名前は知らないんだけどねー。腕は魔法で支えてるからそこまで辛くないんだよ」

「なるほどなー」

クロト君の質問に軽い調子で返す。

… だけど最初は辛かったなあ。思い出すだけで辛い。

「これは… なかなかの一品ですね。使い手を選びそうな。」

「あー言えてる。アタシじゃ使えないわ。これ魔力高すぎ。質もかなりいいし。」

二人が驚いている。けっこう凄い剣だったのかな？ だとしたらそれ持ってたセツカさんは何者なんだろ。

んー、まあいいか別に。

でもあの剣すぐには使えないからなー。まともに振れるようになるまで3ヶ月。それまで振ったら自分が吹っ飛んだし。なんで魔法で支えるって発想が無かったんだろ…。

「ではお返しします」「あ、うん」

おお、危ない意識が変なとこに飛んできた。

にしてもミミさんは丁寧だなあ。きちんと魔法で支えながら返してくれるよ。落とすとかかなり危ないから有り難い。

「では話を戻しますね。触媒… これからは武器と言いますね。

武器を持って魔法を放つのが一般的な発動の仕方ですが、武器に魔法を乗せて使用することも可能です。例えば燃える剣とかですね。

前者を一般的な魔術士と、後者は剣士ならば魔法剣士と呼ばれたりします。勿論グローブや弓矢等にも同じ事ができます。この技法を魔力付加といいます。しかし、かなりの高等技術なので使用者は極僅かです。私もまだ三人しか見たことありませんし」

ミミさんが居住まいを正して、かなりの長文をすらすらと言った。
よく噛まないなあ。

魔力付加：いつものあれかな？…違うか。僕なんかが使えるわけないし。

「話が少し逸れますが…。難しいのは自分で武器に炎などの魔法を乗せることであって、魔力を乗せることは簡単です。ですから、もともと属性を持つ武器に自分の魔力を乗せる事で、武器に属性を持たせることが出来るのです。しかし、自分で魔法を乗せるのとは大きな違いがあり、一定の属性しか持てないのが欠点です。なので旅をするときは属性を持つ武器を複数所持していくのが望ましいですね。」

前置きを置いて武器についての話をするミミさん。話が逸れるというか魔力付加って話の補足みたいな感じだね。

「…なあミミ。確かさっきの話は火山の中じゃ水の魔法は使いにくいとかだったよな。その時に水の属性を持つ武器を持ってるといいのか？自分で魔力を乗せられる人もさ」

クロト君がさつきから気になっっていたらしい疑問をミミさんに聞いていた。

頭良いんだなクロト君って。僕はそんなこと思いつかなかつたし。
…それとも僕が馬鹿だけ？

「えと…魔力付加を使える人達は、潜在的な魔力が高いことが多いのだそうです。潜在的魔力が高ければ、周りの環境に左右されることなく魔法が扱えるのだとか。…私は該当者ではないので一概に

は言えないんですけどね」

クロト君からその質問が来るとは思ってたみたいで、眼を丸くしながらミミさんが言った。彼自身もよくは知らないのか語尾ははっきりしていなかった。

「難しいもんなんだな魔力付加って。」

クロト君がちよつと残念そうに言った。
使ってみたかったのかな？

「そりゃそうかもね。相当の手練れだってなかなか出来ない芸当らしいし。コツが掴めるまで何年かかるかなんて考えたくないわね」

ルミさんが考えるのも嫌なのか顔を歪めながら言った。

「では次の話に移りましょう。」

それではクロトさんに質問です。戦いの時は武器に魔力を持たせないと魔物とは戦えないんです。何故かわかりますか？」

ミミさんがクロト君に質問をしていた。

僕に聞かないのは魔物と戦ったことがあるからだろうか。これが出来なきゃ死んじゃうし。

「…攻撃力を上げるとか？あー！ダメだぜんぜんわかんねえ」

ガシガシと頭をかきむしるクロト君。ちよつと痛そうだ。

「いくつか理由はありますが、一つはクロトさんの言う通り攻撃力を上昇させるためです。後は武器の損傷を防いだりもします。魔物は皮膚が硬かったりするのも多いので。他にも諸説ありますが、とりあえずこの二つを覚えておいて下さい。重要な事ですから。後者は特に」

「ん、わかった」

ミミさんが真剣な顔で念を押す。クロト君も同じ顔で頷き返してた。

その光景がなんとなく微笑ましく思えて顔が緩む。

数時間前に会ったばかりなのに彼らは仲がとても良く見えた。波長が合うのかもしれない。

ふと視線を動かすとそんな二人を、ルミさんが複雑そうに見ているのが視界に入ってきた。嬉しさとか淋しさとかがない交ぜになった視線で彼らを見るルミさんが。

「…ルミさんどうしたの？じーっとあの子達見て」

そんなルミさんが気になって彼女の近くまで這って行って声をかけた。

「えっ！？いやが、眼福だなーって。あ、アンタもそう思わない！？」

僕が急に話しかけたことで、ちょっと動揺したみたいだけど声以外の動作とかがまるで普通だった。

感情を押し殺すように普通に。その様子に少しだけ違和感を覚えた。

「…あー。二人とも美人さんだもんね。」

でも、そういう意味合いでも二人を見ていたらしく、だよね！とさつきセツカさんを口説いていた時みたいに鼻息を荒くして食い付いてきた。…うーん。少し怖いかも

「にしても確かにねー。目の保養だよ。ああ癒される…」

そんなことをポツリと言ったら

(…人のこと言えねーよ。アンタ)

「ん？何か言ったかい？」

ルミさんがボソツと何かを呟いた…気がした。

「いや、別に」

「そう？」

気になって聞いてみたけど簡単にはぐらかされてしまった。

なんだか不名誉なことを言われたような気がするんだけど気のせいだったみたいだね。

そして数分後

「…」

ち、沈黙が痛い…

さっきの会話で話題が尽きてしまったようだ。…どうしよう。まだルミさんとは距離感掴めてないし、どう接していいかわからないんだよね…。でもここで黙っちゃ男が廢る！気がするよ…

諦めるな！勇気を出せリンク！お前は出来る子だ！

とまあ冗談染みた気合い入れは置いといて…

よし！と自身に喝を入れて口を開いた

「あの（ねえ）」

…見事に失敗したねうん。

「さ、先にどうぞ」

女性優先ってやつだよねこーゆー時って。

ルミさんは戸惑いながらも素直に頷いて話し始めた。

「わ、わかった…。あのさ、その、アタシらここに泊めてくれてあ、ありがとね。明日にはここ出て行くだろうし、今言っところかなって思っ、ね」

「…！？」

照れ臭いのか少し顔を赤くしてお礼を言うルミさん。その後本当に本当に嬉しそうに笑った。

その笑顔に胸が締め付けられるような感覚が起こった。ひどく懐かしい気がして。

驚愕で動けない僕を彼女が不思議そうな目で見る。

「どうしたのよ？急に黙って」

「…なんでもないよ。ただもうちょっと居てくれてもって思っただけさ」

動揺を悟られないようにわざと落ち着いた声で話す。まあ、本音だけどね。

「え…居ていいの？」

驚いて、でも嬉しそうに聞いてくる彼女がとても可愛い。どうやら動揺は隠せたみたいだ。

「勿論だよ。クロト君の傷が治るまでくらいはさ、ここに居ても僕だって家出娘達と怪我人を放り出すほど良心が無いわけではないし、彼女達に興味もある。どちらかといえば興味の方が大きいんだけどね。

まあ、僕は自分の為に彼女達にいて欲しいだけに過ぎないんだよね。だから、さっきみたいに邪気の無い笑顔でお礼を言われるとももの凄く困るんだよ。罪悪感とかで！

「ほんと！？じゃあ三日くらいお世話になるかも！」

三日って…。足の骨折を三日で治せるルミさんにビックリだよ…

「三日かぁ。なんだか騒がしくなりそうだねルミさん。」

少し先の光景を想像して笑ってしまう。騒がしくて楽しそうだ。

「どづいつ意味よ!」

ルミさんが笑いながら怒鳴る。うん、楽しそうだ。

「あーもうっ!これからよろしくねリンク。あとアタシのことはルミでいーよ。堅っ苦しいのは嫌いだし」

しばらく笑い合ったあと唐突にルミさんが叫んだ。そしてさっきとは違う快活な笑顔で握手を求めてきた。

「うん!よろしくルミ!」

僕も釣られて笑いながら、ルミの手を握った。

孤児院にて 3 (後書き)

リンクさん視点によって彼のアホさ加減が出てればいいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5802w/>

日常からさようなら

2011年11月13日09時38分発行